

## オバマもすなる「シェン語の挨拶」考 — 語感と語源への誘い

小馬 徹

2015年7月24日(金)午後、バラック・オバマ米大統領の専用機 Air Force Oneが、ケニアの首都ナイロビのジョモ・ケニヤッタ国際空港に降り立った。この訪問でケニア人があっと驚き、痛く傷付きもしたのは、その警備からケニア側が完全にシャット・アウトされた事実だった。この日の夕方、オバマは長旅の疲れも見せず、晩餐会を開いてケニア人親族たちをもてなし、歓談した。

オバマの実父(故バラック・オバマ・シニア)は、南西ケニアのルオ人で、米国留学中にオバマの母親となる白人女性人類学者と知り合って結婚した。オバマが大統領就任後即座に訪れる期待が高かったので、ケニアには任期終盤になっての訪問に些かの失望感もあったのだが、ともかく、彼はケニアを訪れた最初の現役米大統領となった。一方、彼の届け出られた出生地ハワイは偽りで、実際にはルオ人の土地だったらしいとされ、米国のソーシャル・メディア上では「最初のケニア人米大統領」という苦いコメントも飛び交った。

熱烈歓迎の最中に澁むこうした微妙な空気を、翌25日(土)、同地で開催された Global Entrepreneurship Summitの開会式典での見事な挨拶戦略が、一気に吹き飛ばした。オバマは、ほぼ開口一番、“Jambo?... Niaje wasee?...Hawayuni?”と矢継ぎ早に現地語の挨拶を繰り出した。会衆は一瞬棒を呑み込んだかのごとく沈黙したが、驚きの風情はすぐに氷解して熱狂に変わり、拍手と歓声

がホールを響もして暫し鳴り止まなかった。

“Jambo?”はスワヒリ語(東アフリカ地域のリンガ・フランカ、話者1億人超)の口語的挨拶の常套句で、世界的に知られてもいる。語感は「元氣?」に近い。続く“Niaje?”は、ケニアの若者言語シェン語の最も一般的な挨拶言葉だ。他には、挨拶として“Sasa?”(今は[どう]?)や“Vipi?”(どう?)も多用されるが、“Hawayuni?”は全く耳慣れない。英語の“How are you?”に海岸スワヒリ語(海岸部の母語の一つ)の複数人称接尾辞“-ni”を付けたシェン語風表現だろうか。人々の一瞬の戸惑いの原因の一つがここにあったと思う。

無論、熱狂の謂われは“Niaje wasee?”の方だった。“wasee”(sg. msee)の語源はスワヒリ語で「大人、老人」を意味する“wazee”(sg. mzee)なのだが、語意は「てめえら、あんたら」へと遷移し、“Niaje wasee?”の語感英口語の“Hi guys!”に通じる。

シェン語は、1990年代初めの電波自由化で蔭生したFM放送局が重用して急速に普及した。2000年代の旺盛な反エイズ・キャンペーンに汎用されると、そのクールさがうけてさらに若者の心を驚掴みにする。政治家も若者の歓心を買おうと選挙時にシェン語を援用し、今度のケニア訪問でオバマもそれに倣った。シェン語普及団体は、ついに世界の認知を勝ち得たと色めきたったものだ。

なお、植民地期に都市労働者として政策的に動員されて首都ナイロビ郊外に住まわされた(西ナ

イル諸語系のルオ人とバントゥ諸語系のルヒア人を中核とする)南西ケニアの諸民族が、1960年代、相互の意思疎通と生き残りのために、ピジン的な内陸スワヒリ語に英語とルオ語やルヒヤ語を初めとする種々の民族語の語彙を接ぎ木したことで生まれた新混成言語が、やがてシェン語となった。

さて、寡聞にして“*Niaje*?”の語源が論じられたのを全く知らない。そこで、本稿は大胆な仮説を立て、叩き台として供したい。まず、タンザニアが近代言語へと長年整備を推し進めてきた正統スワヒリ語(*Kiswahili sanifu*)に“*Niache*.”の表現があり、また“*Niache nimbé*”(“Let me sing.”または“Leave me to sing.”の意)という題の流行歌が思い出される。タンザニア音楽は、東アフリカ海岸部(*swahili*)の伝統音楽ターラブの流れを引いていて、隣接する東アフリカ諸国でも親しまれる美しい旋律の歌曲を幾つも生み出してきた。

一方現代ケニアは、(南ナイル語を話す)カレンジン諸民族の歌手たちが席卷している。カレンジン諸語は有声音と無声音(例えば /j/ と /ch/)を区別せず、両者は筆記上ほぼ無原則に混用され

る。だから、彼らが“*Niache nimbé*”を奏する時、それは同時に“*Niaje nimbé*”としても音声的に現象する。他方、首都ナイロビとその隣接地に住むケニア最大のギクユ民族等のバントゥ語系諸民族にはその混用は滑稽で、(政治的には強力なライバルだが、前近代的な牛牧に執着して)僻遠の地に住むカレンジン諸民族の田舎臭さを揶揄する恰好の材料となるのだ。若者言葉たるシェン語表現の特質は、起源をなす隠語的性格をなおも強く温存し、田舎を片端からからかう気風が今も盛なこと。ただし、その田舎臭さを敢えて引き受け、前面に掲げて権威を嘲弄しようとする両義的な傾きも合わせ持っていて、簡単に気を許せない。

こうして“*Niaje wasee*?”が成立したとすれば、「ほっといてくん、てめっち」と直訳できるこの挨拶言葉の、正にシェン語的な通俗性と反語的気骨がよく腑に落ちることになる。また、「ご機嫌いかが?」に当たるルオ語の普通の挨拶表現“*Ere wache*?”が幾分“*Niaje*?”(“*Niache*.”)に近い発音であることも、或いは後者の表現を包摂し易くした一つの要因となっているのかも知れない。

\*\*\*\*\*

言語研究センター共同研究グループ経過報告

## 音声ビデオを用いたナレーションによる 英語プレゼンテーション、ツアーガイド演習に関するケーススタディ

ソリス・メイビクトレア セリノ／佐藤 裕美

日本の史跡、観光名所を紹介する無声のビデオを作成し、学習者が英語のナレーションを付けプレゼンテーションやツアーガイドの演習を行い、スピーキングとスクリプト執筆をとおしてライティングの活動との融合を試みた教材作成を行っている。学習者のモチベーションの維持や学習成果についてこの学習法と教材の有効性を調

査するケーススタディを行う。今年度前半は、教材用のビデオ撮影を沖縄、京都で行った。今後、これらのビデオを授業用に適切な長さに編集し、これまでに作成したビデオ教材と合わせてスクリプトライティング、プレゼンテーションの演習に使用する予定である。

## 言語景観に関する社会言語学的基礎研究

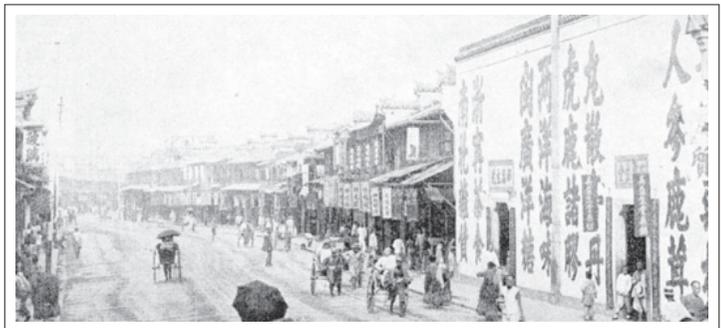
彭 国躍／尹 亭仁

近年、言語景観はことばと社会の関係を示すバロメータとして広く注目され、それに関する研究調査も言語接触、言語威信、言語政策、民族紛争と移民問題など多くの関連分野とのかかわりにおいて新しい展開を見せながら、さまざまな問題や課題を提起している。本共同研究は東アジアを中心に言語景観に関する社会言語学的基礎研究を行うものである。2015年度の研究活動について以下のように報告する。

尹は研究データ整備の一環としてソウルに2度調査に出かけた。調査の結果は「ソウルの言語景観—英語・日本語・中国語の表記を中心に」(『人文研究』No.187 神奈川大学人文学会 2015)に論文としてまとめた。ソウルの街中の景観から中国語が勢いを増している様子を取り上げた。また、言語景観を外国語教育に生かせる可能性についても論じた。2016年1月には上海の言語景観の調査に出かけるため、回る場所、インフォーマントの依頼、チェック項目など、下準備をしている。本研究をより体系的・実践的に進めるため、「日本企業の海外進出と日本文化の発信—アジア11都市における言語・色彩景観への影響」という研究課題名で2016年度科学研究費を申請している。

彭は今年度の研究成果として言語景観の通時的考察を行った論文(中国語)「上海南京路上語言景観的百

年変遷—歴史社会言語学個案研究」を完成させた。同論文は2015年12月刊行の中国の社会言語学会誌『中国社会言語学』(第23期)に掲載された。現在資料調査を終え、論文執筆中の研究テーマは「上海の都市形成期における言語景観—歴史社会言語学の事例研究」である。この論文は主に百年前頃の上海の言語景観に関する共時的研究で、2016年度に日本国内の言語学関連の学会誌に投稿する予定である。さらにいまは来年度後期の研究テーマ「革命がもたらす都市言語景観の変化—20世紀中頃の上海を事例に」と「横浜中華街の言語景観に関する社会言語学的考察」のための資料収集とパイロット調査も着々と進めている。



(写真は彭により収集された1900年頃の上海南京路の言語景観映像45枚中の2枚である。いずれも撮影者不明。)

## 外国語学習・教育における レアリアの具体的教育内容に関する研究

堤 正典／西野 清治

昨年度の初修レベルのロシア語教育におけるレアリアの学習内容の検討を行い、特に学習語彙に注意を払った。今年度も初修レベルの語彙についてレアリア学習の面から検討を続けた。

学習語彙においては、ロシア文化に特有なものや、日本人学習者にわかりにくいものなどの語はそれなりの説明を付け加えなければならない。説明を加えなければならないのは、それなりの負担ではあるが、そのような語を適切に含めることはロシア語に慣れさせるのに必要でさえある。

ロシア語の多義語において、日本語では異なる語でしか表されないものもあるが、ロシア語の一部では英語と共通して、同一の語で表すことができるものも少なくない（語源が共通するものも

あるが、語源としては関係が見いだせないような場合でも、多義性において関係が同等であるものも存在する）。

また、堤はかつての共同研究者である非常勤講師の小林潔氏と共同で、スペイン・グラナダで開催された国際ロシア語・ロシア文学教師連盟大会（四年に一度開催）で「ロシア語を学習していない学生に対するロシア文化教育」をテーマに報告を行った。この研究は、外国語学習におけるレアリア知識というよりも、ロシア文化を直接教育する際のことを取り上げたわけだが、学習者に異文化について教育することでは共通する。この成果は別の角度から本研究と関わるものであるので、ここでふれておく。

\*\*\*\*\*

## 音響機器等を利用した音声教材の試作

小松 雅彦／松村 文芳

近年、技術的な発達によって、さまざまな音声分析のための機器が従来に比べて廉価で利用できるようになってきているが、音声教育への応用は限られている。申請者らは、2013～2014年度に「音響機器等を利用した英語音声教育のための予備的調査」を行い、いくつかの技術についての利用可能性の調査検討を行った。本研究プロジェクトでは、それらの技術を用いた教材の試作に着手する予定である。現在、以下のことを行っている。

(1) 前年度に採取した NDI Wave Speech Research System のデータの分析準備、および他の

データベースとの比較検討。

(2) ストリーミングサーバを利用した英語音声のディクテーション演習システムのプロトタイプ作成準備。

(3) 「英語リズム学習における強勢タイミング提示のための視聴覚教材」（甲南大学北村達也研究室）の試用の準備。

(4) 中国語 CALL システムの使用経験から、英語の音声教育との関連・応用についての検討。CALL システムにおける波形表示に与える声調の役割の考察。

## 新漢語水平考試 5 級問題を利用した 中国語自動学習システムの開発

加藤 宏紀／彭 国躍／松村 文芳

本研究グループでは新HSK（新漢語水平考試）5級の問題を題材とした自動学習システムを開発している。本自動学習システムは、サーバ・クライアントシステムを採用し、ネットワーク内で学習者が個々の要求に応じて、自由に中国語学習を進める環境を提供している。

新HSK5級は「聞き取り」、「読解」、「作文」の三つのパートからなり、2500語程度の単語および常用の文法をマスターしているレベルを対象としている。

現段階では、新HSK5級の「聞き取り」の問題

をモデルに自動学習を可能にするためのプログラムを作成している。本自動学習システムで重要視しているのは、丁寧な解説の提供による自律的学習のサポートである。すなわち、問題の種類、出題のねらい、重要な語彙や文法項目などについて詳しい解説を正解とともに表示し、効果的な学習を進められる環境を提供することである。

今後は「読解」と「作文」の問題の問題をモデルとするプログラムを作成すると同時に、各パートの問題をさらに増やし、さらなる中国語自動学習システムを充実させていく。

\*\*\*\*\*

## 節周辺部の構造、素性の普遍性と個別性

佐藤 裕美／辻子 美保子／片岡 喜代子／加藤 宏紀／相原 昌彦

時制、アスペクト、モダリティ、否定、文タイプなどに関わる節周辺部の構造や節構造に関わる形式素性についての様々な言語に観察される現象の考察に基づき、節構造の普遍的性質、個別言語的特徴について研究を行っている。今年度前半は5月と7月に研究会を開催し、今年度末に刊行予定の本研究グループの研究成果をまとめた神奈川大学言語学研究叢書6の編集方針について話し合いを行い、掲載予定の各自の論文の執筆状況と内容の報告を行った。本書は、命題構成要素が節周辺部要素と如何に関わり、周辺要素の働きが節構造に如何に反映されるかを探り、更には文脈にお

ける発話としての働きも視野に入れた研究の成果である。時制やアスペクト、格素性の付値、数量詞解釈、否定現象から見た周辺部構造のあり方、そして疑問を含む文末助詞による命題態度表明などを、日本語・英語・中国語・スペイン語の分析をもとに論じることをテーマとしている。執筆者は、本研究グループメンバーの相原昌彦、片岡喜代子、加藤宏紀、佐藤裕美、辻子美保子、武内道子（本学名誉教授）と、上田由紀子（秋田大学教授）。10月に入稿し、予定通り出版に向けた作業が進捗している。

## 日本語・韓国語教育における漢語動詞の研究

高木 南欧子／尹 亭仁

漢字は、字形、読み、意味の3つを備えており、言語運用の観点から見ると、情報の伝達において効率が良い。文章中に馴染みのない漢語が出てきたとしても、意味の類推が可能である。日本語・韓国語の教育においても同様のことが言える。日本語と韓国語には、同じ漢語由来の語彙が多く存在するため、読みを手がかりとして字形にたどり着き、意味を類推することが可能である。しかしながら、それぞれの用法の違いから、誤用が起ることも指摘されている。

本研究グループは、言語教育の立場からこの問題について考察を行い、それぞれの言語現場に結果を還元することを目的としている。

今年度は、初級、中級の教材を広く収集し、漢語動詞の抽出を行った。現在は、それぞれの提出順序、例文、指導書の記述の有無等を含めたデータの整理を行っている。今後は、誤用が起きる可能性を検討するとともに、実際に誤用が出るかの検証を行い、さらに分析をすすめていく予定である。

\*\*\*\*\*

## スペイン語を専攻する学生のための教材研究

Arturo Varón／Victor Calderón／菊田 和佳子／片岡 喜代子

私達研究グループでは、引き続きより良い教材やそれを用いた授業方法を開発すべく、研究活動を行っている。当学科の教育プログラムは、スペイン語を専攻言語とし、その語学力を用いて、様々な分野の専門研究を行うというのが目標である。その教育課程に見合うような語学力を修得することを目指して、カリキュラム編成や授業内容を考え、よりよい教材と教授法を考案している。

語学の基礎学習には、文法項目等いつの時代も変わらぬ必須事項と、世の中の移り変わりや世界情勢によって学修事項に組み込んで行くべきものがある。特に語彙は、10年毎くらいの速さで入れ替えを検討すべき項目である。

その両者のバランスをとりつつ、教材を検討している。

授業方針としては、日本人教員とスペイン語母語話者教員が半分ずつくらい担当する前半2学年の学修時期において、両授業内容が連携して、より効率のよい基礎学修を目指し、そのための教材を検討中である。専門研究の加わる後半2年間には、その分野独自の語彙を加えた学修が必須になるが、それにはその語彙の背景にある世界規模での知識教養の修得が必要である。

その点もふまえて、幅広い語彙の理解力に基づいた文章理解へつなげ、幅広く応用可能な語学力修得を目指している。(kk)

## 『良友』画報と上海文学

孫 安石／山口 建治／村井 寛志／大里 浩秋

『良友』画報を取り上げた本研究は、2015年から3年間に亘り学内共同研究（『良友』画報と東アジアの都市文化に関する共同研究）に採択され、今までの活動記録をすべて掘り起こし研究会のブログ <http://liangyou.jugem.jp/> にすべての内容を一般公開している。以下、2015年4月からの活動記録を記す。

・共同開催－非文字資料センター租界班第47回租界班研究会(2015年4月28日)の開催。  
日時：2015年4月28日（火）  
場所：神奈川大学横浜キャンパス 1号館301会議室

主催：非文字資料研究センター租界班  
共催：学内共同研究『良友』画報研究班

≪報告≫

- (1) 「上海社会科学院歴史研究所の活動紹介と上海におけるユダヤ人難民の研究」王健（上海社会科学院・歴史研究所副所長）  
通訳（葛濤、上海社会科学院、研究員）
  - (2) 「上海の在華紡研究について－建築・生活・歴史」須崎文代（神奈川大学）
  - (3) 2015年・租界班の活動予定
- ・日時：2015年7月29日－8月2日  
台湾の中央研究院の都市研究グループとの意見

交換。近代史研究所の檔案館、図書館、電腦室の『良友』画報関連の調査。

・日時：2015年9月2日(水曜日) 午後3時－5時  
場所：神奈川大学・横浜キャンパス20号館212室  
報告：

- (1) 台湾調査の報告－菊池敏夫、孫安石、田島奈都子
- (2) 中国美術の研究と展示に関連する近年の動向 吳孟晋（京都国立博物館）
- (3) 近年の上海史研究とジェンダー 石川照子（大妻女子大学）
- (4) 今後の日程、内容相談（香港会議、上海会議、論文集の刊行など）

・日時：2015年12月4日（金曜日）  
場所：神奈川大学・横浜キャンパス20号館212室  
報告：

- (1) Liangyou: Kaleidoscopic Modernity and the Shanghai Global Metropolis, 1926-1945 (Modern Asian Art and Visual Culture) 書評－菊池敏夫、孫安石担当
- (2) 『良友』と『時代漫画』における漫画家 城山拓也
- (3) 今後の日程、内容相談（上海会議、論文集の刊行など）

\*\*\*\*\*

### 【新入所員紹介】

中国語学科 劉 巖 外国人特任助教

神奈川大学外国語学部外国人特任助教の劉巖（リュウヒョウ）と申します。現在、主に「言語学」と「第二言語習得」という2つの分野の研究に取り組んでいます。言語学に関しては、これまで談話文法の立場から指示・照応現象を中心に、日本語、中国語及び英語を対象言語として理論的な対照研究をしてきました。いまは歴史語

用論の観点から中国語指示詞の歴史の変遷の解明を目指しつつ、古代日本語との通時的な対照研究の可能性を探っています。第二言語習得の研究については、2015年度に日本語母語話者の中国語文法習得における問題点を解決するため、「京都大学中国語学習者コーパス」の構築を完成しました。現在は中国語教育の難点とされる機能語の習得研究を中心に、学習者の習得状況に基づいた教育文法の構築と効果的な教授法の実現を目指しています。

【新入所員紹介】

国際文化交流学科 鈴木 祐一 助教

2015・16年度に、日本学術振興会の科学研究費助成事業（研究活動スタート支援）の支援により、どのように効果的に外国語学習の間隔を調整できるかを調べている。同時に、個人の特徴（適性）に合った学習間隔も特定するために、実証研究を行っている。外国語教室で外国語学習に使える時間は限られており、練習時間は変えずに、練習の間隔の空け方を変えるだけで、外国語の習得

を促進することはできるのだろうか。例えば、1日開けて繰り返し練習するのと（集中学習）、7日間空ける（分散学習）のでは、どちらの方が文法知識の定着が促進されるのだろうか。更に、記憶や言語分析の得意・不得意（適性）という個人差要因によって、最も効果的な練習間隔の空け方が変わる可能性がある。以上の問題意識から、分散・集中学習と適性の役割を同時に調べるために実験を行い、外国語学習のメカニズムの解明、そして外国語教育に役立つ情報を得ることを目標としている。

\*\*\*\*\*

【言語学研究叢書 No.5 の紹介】

## 「英語学習動機の減退要因の探求」 —日本人学習者の調査を中心に—

菊地 恵太

18歳人口の減少に伴う「大学全入時代」の到来は、私たちが日ごろ接する大学生の多様化を生んでいる。例えば、後期に受け持っている必修授業の履修生の中には、教員の目が届かなくなったと思うとすぐにスマートフォンの画面に目を移しているものもある。授業中は、携帯電話をオフにしましょう、私語を慎みましょうと何度も注意していると教員の意欲も低下してしまうであろう。このような学生は周りの雰囲気さえも変えてしまう。こういった学生の外国語学習への意欲を高め、学習を維持させ、高い目的意識を持って少なくとも大学卒業までの4年間勉強に励んでもらうのは、どのようにしたらよいのだろうか。

昨年3月に出版させて頂いた拙著では、今までの先行研究と私が行ってきたアンケートやインタビューを中心とした研究をまとめ、どのような経験が日本人英語学習者の学習動機の減退要因につながるかに関して議論した。外国語学習は地道で

長い期間の必要なプロセスである。そのプロセスの中で学習者は「教員の言動」「授業環境」「周りの人々からの影響」などによってやる気の減退を経験する。本書では、そういった経験をしている学習意欲の構造を分析しながら、現場の教員が様々な学習者を扱うべきかを考察した。

考えてみれば、私自身も多くの経験によって英語学習意欲の減退を経験した。暗記や訳読ばかりを課せられた高校時代、毎回眠気に襲われる退屈な大学での授業など経験をして今でも英語学習の意欲を失わないでいる。そのような学習者をどうやって育成できるか、そうした疑問への答えも本書を読みながらぜひ考えていただければと思っています。本書ができるだけ多くの方々の目に触れ、どのように英語学習動機減退要因を対処していけばよいかを考え、多くの外国語学習者のやる気を維持させるきっかけになればと切に願っている。